

宝の海から

白浜で出会った生きものたち

京都大学助教授 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

異常に多い田辺湾の熱帯貝

9月になっても引き続き、他の巻貝類とは随分異なる形で来襲する台風の影響でシムメノウフネガイ調査ができていないという異例の年になった。6日には震度3~4の地震が2回あり、高さ数十センチの津波が押し寄せた。南海地震の再来がいつか分からず、不安がつつた矢先に新潟県中越地震が発生した。この影響がどうかは分からないが、台風の影響が収まってからも打ち上げ記録のなかった珍しい貝殻が、京都大学瀬戸臨海実験所周辺で続々と発見された。

南浜にシムメノウフネガイが打ち上がった。1個体のまだ十分に成長していない個体だった。シムメノウフネガイは、アカニシ類やアワビ類などの巻貝やアスマニシキなどの二枚貝の生体の貝殻上に付着する。殻の長さは大きいもので3センチほどになり、内側には全体を覆わないものの、殻板と呼ばれる張り出しがある。形が全体としてスリッパ状になっており、

この平らな巻貝は、実は北米太平洋沿岸が原産である。わが国では、1968年に三浦半島で発見されて以来、各地に広がった外来種なのである。和歌山県では、84年以降、全県内に分布を拡大している。

シムメノウフネガイの定着は、海外と往来する船舶のバラスト水に幼生が紛れ込んでしまい、わが国沿岸でバラスト水の交換時に廃棄された後、生息条件がうまくあっている。幼生よりむしろ親の段階で船底に付着して侵入したという推察もあるが、生息からみてこの可能性は少ない。シムメノウフネガイは、卵囊(らん)をのこす足の下で保護する性質をもっている。科に属し、この科では、異国の日本でも、親のガイドによって、いったん打ち上がった後、アワビもシムメノウフネガイと同じような生活をしているので、シムメノウフネガイが田辺湾でよく繁殖すると、自然界にあるお互いに要求を同じくする2種が、同じ住み場所には共存できないという規則にたがって、猛烈な競争がおこるだろう。

タカラガイ類にさらに3種の追加があった。ひとつは小形種のカバホシダカラガイが1個体だけ

続く未記録の貝殻打ち上げ

交換時に廃棄された後、もない中間的な性(間性)の個体になってしまふ。シムメノウフネガイの近縁種として、北浜で頻りに打ち上がるのが在来種のアワビである。アワビの貝殻の表面に可能性は少ない。シムメノウフネガイは、卵囊(らん)をのこす足の下で保護する性質をもっている。科に属し、この科では、異国の日本でも、親のガイドによって、いったん打ち上がった後、アワビもシムメノウフネガイと同じような生活をしているので、シムメノウフネガイが田辺湾でよく繁殖すると、自然界にあるお互いに要求を同じくする2種が、同じ住み場所には共存できないという規則にたがって、猛烈な競争がおこるだろう。

タカラガイ類にさらに3種の追加があった。ひとつは小形種のカバホシダカラガイが1個体だけ



4センチを超える大形のスソムラサキダカラ



シムメノウフネガイは外来種で在来種の生きた貝類に付着。近縁種のアワビは貝殻の表面に特徴的な刻みが多い。数ある。



イボダカラガイは紀伊半島以南に生息する小形のタカラガイ



小形のタカラガイの1種カバホシダカラは特徴的な模様を持つ

打ち上がった。房総以南の水深20メートルに生息すると言われているが、田辺湾での生息を確認していない。灰褐色の殻の背面上に2本の白っぽい筋が特徴だ。もうひとつは紀伊半島が北限の小型種イボダカラ。これも1個体だけが発見された。灰白色の殻の背面全体に粒状のイボが多数ある。4センチを超えるスソムラサキダカラは複数個体が打ち上がったことになった。

タカラガイ類の生息種数は、その海域の熱帯要素を示す一つの指標である。南国の南西諸島からだんだん北へ行くにつれてその種類数は減少する。

田辺湾は黒潮の影響があるとはいえず、高緯度の割には異常に多いタカラガイが記録されたことになっている。北浜では、今回のサツマボラの発見で、フジツガイ科の打ち上げ記録は計12種となり、今回のサツマボラを含め、レイシボラ、ボソジュセイラ、ハイイロボラ、シノマキガイ、ミツカドボラ、シオボラの7種が紀伊半島を北限としており、今後

も注目したい。

大型の巻貝もいくつか追加があった。イチジク状の貝殻をもつヒワガイは、殻の長さが10センチほどあり、薄い褐色の貝殻の表面は細かい網目状になっている特徴を持つ。背面に数本の帯があるのも特徴である。雌雄で殻の形に違いがあるというので、多数が集まればその違いがわかるだろう。わが国では房総以南の水深50メートルまで生息する。ヒワガイは、ヒワガイ科に属し、日本にはたった1属4種だけがこの科に含まれる。田辺湾周辺ではヒワガイ科の記録は今回のヒワガイ1種のみとなる。